

カムイコタンの自然と伝説を最初に紹介したのは松浦武四郎である。

成ると時として蝮蛇が有るよしにて、決て此穴に入るものなし。」

安政四年(一八五七年)の調査の記録である。今回は、紙幅の関係で、掲載図の★印のシラッヂセ(sirat-cise)と、カムイコタンの別名岩・家(岩屋)と、カムイコタンの別名シユポロ(スボロsuporo)川水逆巻く激流)を紹介する。

松浦武四郎は、カムイコタンの入口のバラ・モイ(para-moy広い・湾)の記述の前に、掲載図の★印のシラッヂセ(シラリチセ)について、実際には見ていないが、添画を描き、次のように書いた(『再窓石狩日誌』)。

「シラリチセー峨々たる高山の根の岩なる處に一つの穴有るよし也。是をシラリチセと云。シラリは岩、チセは家也。雪降候哉往来のアイヌ等は、此穴にて止宿する由なるが、夏に

松浦武四郎が表記したシラリチセ(sirar-cise)は、アイヌ語の音韻変化で、シラッヂセ(sirat-cise)岩・家(岩屋)となる。また、松浦武四郎は、ダイジエスト版の『石狩日誌』では、「シユマチセ(suma-cise 岩・家)とて岩窟有。其奥を知者無と。雪中には皆是に入りて宿すとかや。」と記述している。同じ意味で、二つの呼称があつたことが分かる。いずれにしても、丸木舟での往来時代の辛苦が



大正11年の神居古潭 明治二十
年調査した永
大田方正は、
「シラッヂ

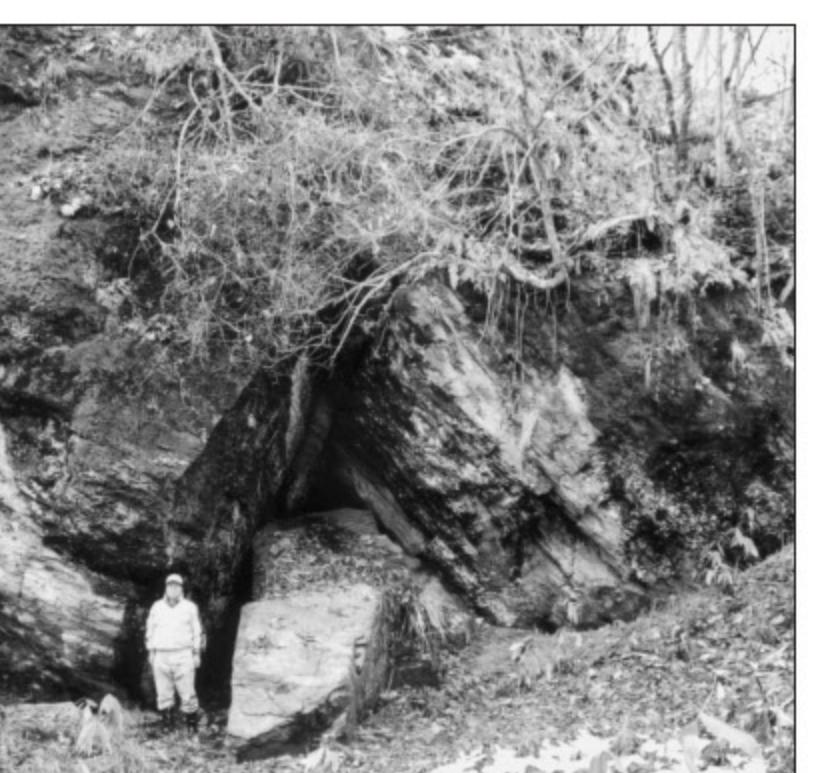
セ(shirat-chise 岩屋)一千人
許を容るべし。アイヌ、時に宿すと云ふ。」と書いた。

上の写真は、平成十八年に再訪した時のもので、大きさが分かるように、大正十一年の写真でも分かるよう

筆者も入れて撮影した。筆者の上の三
角部分から入るのだが、岩盤の崩落や
土砂の堆積で、現況ではせいぜい五人
くらいしか入れない状況であった。

さて、もう一枚の写真は、大正十
年の現・神居大橋の前身と、そこから
上流を撮影した貴重な写真である
(北海道立文書館蔵)。複写の関係で見
にくいか、左側に、神居古潭駅と進行
中の列車が写っている。比較的原始
に近いカムイコタンの川筋の姿と、
次のカムイコタンの別名シユポロ

は、天塩川の最大難所の「智東の滝」と
言わた所を、「カムイコタン(シボ
ロ)スボロ)ー乱石の上、湍流激奔、
湧濤ノ如シ」と、旭川のカムイコタン



★印のシラッヂセ

【現神居古潭】



高橋 基

旭川のアイヌ語 地名研究

④

高橋 基

伺える伝承
である。

松浦武四郎は、次回でも触れるが、
と考えて、掲載したものである。

松浦武四郎は、次回でも触れるが、
と考えて、掲載したものである。

現・神居大橋付近からハルシナイ(春
志内)までをカムイコタンと言い、別
名を「シユホロ」と云。シユホロは両方

峨々として、中を水の落る処と云事
也。カモイコタンと云ふは神が有る

処と云事也。」と記述している。

旭川のカムイコタン③

永田方正は、「シユボロ(shup-
poro 鮫の産卵多き処)ーカムイコタ
ンの原名なり。或アイヌ云、シユボロ
は、ブイラボロと同義にて大瀬の義

なりと。」と書いた。

文化四年(一八〇七年)、近藤重蔵
は、天塩川の最大難所の「智東の滝」と
言わた所を、「カムイコタン(シボ
ロ)スボロ)ー乱石の上、湍流激奔、
湧濤ノ如シ」と、旭川のカムイコタン

と全く同じように記録している。